

ジャパンラグビートップリーグの現状と未来に関する研究 The research on the present state and prospect of Japan. Rugby Top League

1K07B189-9 松井 一樹
指導教員 主査 武藤 泰明 先生 副査 問野 義之 先生

【目的】

日本ラグビーフットボール協会は、2011年ラグビーワールドカップ招致に失敗した。この失敗を活かし、2019年ラグビーワールドカップの日本開催に成功した。このワールドカップを成功させるため、日本代表の国際試合における勝利が必要になってきた。なぜなら、開催国の試合結果は、ラグビーワールドカップの収支に大きく影響するからだ。昨今の日本代表は、国際試合で結果を残す事ができていなかった。日本代表のレベルを上げるためには、国内リーグであるジャパンラグビートップリーグの活性化を促す必要がある。ジャパンラグビートップリーグの現状を把握し、活性化させるために、このまま企業スポーツの形態を続けるのか。または、プロリーグにする方がいいのか。その答えを机上ではあるが、検討してみたいと考えたからである。

私事になってしまうが、私は、高校時代からラグビーを始め、大学ラグビーを最後に競技生活の終止符を打つ。高校の恩師から人間としての礎を学び、早稲田大学ラグビー蹴球部に入部した。大学ラグビーでは、ラグビーの様々な知識を学び私のラグビーに対する考え方を全て変えた。7年間のラグビー生活で得た人生の糧や学びは、ラグビー無しでは得る事ができなかった。私のラグビー生活の集大成として卒業論文に残したかった。そして、この研究が、私の7年間続いたラグビー生活の集大成である。

【方法】

ラグビー専門誌であるラグビーマガジンやスポーツ誌 Number の日本ラグビーフットボール協会関係者や現役選手のインタビューや早稲田大学ラグビー蹴球部関係者などのインタビューからジャパンラグビートップリーグの現状把握を行った。海外のプロリーグや国内のプロリーグやセミプロリーグの給与体系などを参考にし、ジャパンラグビートップリーグの未来を考えた。I 章では、ジャパンラグビートップリーグの概要と現状を様々な媒体から得る事で現状把握をした。II 章では、2019 年日本開催するワールドカップの情報と課題を明らかにした。III 章では、ジャパンラグビートッ

プリーグが、プロ化にしない理由を著者自身が調査を通じて、考えられるものを列挙した。IV 章では、各国のラグビーの年間試合数を比較した。V 章では、ここまでの章を参考にジャパンラグビートップリーグにプロの選択を論じた。VI 章は、論文のまとめと謝辞である。

【結果】

ジャパンラグビートップリーグは、プロリーグとして活動する事を考えておらず、ラグビー社会人リーグから続いている企業スポーツの形態を継続する事を様々なインタビュー記事で主張していた。日本ラグビーフットボール協会副会長、和田文男やジャパンラグビートップリーグ最高執行責任者、稲垣順一などは、ワールドカップを成功させるために、入場料、スポンサーからの協賛金、放送権料の収入 3 本柱を確保する必要があると主張していた。そのために、ラグビー日本代表の国際大会で結果を残す必要性や日本のラグビー競技人口、観戦者の増加などの長期計画を組み込んだ「JRFU 戦略計画:2010-2019」を発表し、ワールドカップを成功させようとしている。しかし、海外選手や海外から招集されたコーチには、日本選手のプロフェッショナル意識が、海外のラグビー強豪国より薄い事やレフェリングの統一、都市に集中するジャパンラグビートップリーグのチームなどの問題があった。この問題を解決するために、ジャパンラグビートップリーグは、プロリーグとしての一步を踏み出す必要があるという結論に達した。

【考察】

以上の結果を踏まえて、ワールドカップや日本ラグビーの発展を考えた時、ジャパンラグビートップリーグは、プロ化という選択を視野に入れなくてはならない状況にある。ジャパンラグビートップリーグが継続している企業スポーツは、日本ラグビーフットボール協会にとって様々なメリットが存在している。しかし、企業スポーツが、日本ラグビーの発展や選手のセカンドキャリアを根本から解決するものではない。日本ラグビー界のために、2019 年のワールドカップを成功させなければならないのだが、今後、日本ラグビーフットボール協会は、「JRFU 戦略計画:2010-2019」を基にワールドカップを成功させるとともに、プロ化への準備を進める必要がある。